

## 紹介

中村秋香著 鈴木亮編

『秋香集 長歌』翻刻と解題

藤井美保子

成蹊学園資料館には学園創立者中村春二の父、明治の国文学者であり、新体歌を推進した中村秋香の未紹介遺稿も数多く残されている。これまで鈴木亮氏がその整理・調査にあたってこられたが、調査の過程で中村秋香作「長歌集草稿」が発見された。それは明治四十年に出版された『秋香集 短歌』と対をなすと考えられる『秋香集 長歌』である。本書は古雅な趣も残る新体歌の詠調の中に、明治時代を覆った国家主義・道徳主義のほとぼりを随所に認められる今からみれば特異な歌集である。長く埋もれていた本書の刊行は、中村秋香の文事および明治という時代に、新たな評価が示されることとなろう。なお、本書は本来上下二巻あるべき歌集の下巻という序文を寄せた掛斐高氏は、伝統的な歌集の部立を考えれば、この『秋香集 長歌』下巻はおそらく「雑」の部にあたり、上巻には「四季」や「恋」の新体歌が収められていた可能性を指摘されている。

## 一 中村秋香の経歴

「解題」によれば中村秋香は天保十二年（1841）、静岡藩医中村玄昱の長男として駿府に生まれた。さらに、父方の祖父は漢学者山梨

稲川、母方の祖父は国学者松木直秀（琴園）と、徳川幕府末期における文化学問を極めた家庭環境で幼少青年期を過ごしている。後年、明治文学界と学校教育界に尽力貢献した素地がおのずと形成されていたといえよう。

秋香は明治四年（1871）の廃藩置県後、名古屋県へ仕官。やがて教部省、文部省と官吏のキャリアを歩んだ。明治二十一年（1888）四十七歳の時東京高等女学校教諭、さらに女子東京高等師範学校教諭、第一高等中学校教授と、以後教育界に奉職して明治三十年には宮内省御歌所寄人となっている。巻末に付された秋香の詳細な経歴表と著作一覧から、教育者秋香、歌人秋香の足跡をたどることができる。

## 二 長歌・新体歌・新体詩

作品を紹介するにあたって、秋香は伝統和歌の歌人であったこと、および明治新時代において新しい詩歌を探索し新体歌を提唱発展させようとしたことを述べなくてはならない。

明治十五年（1884）、帝国大学の教官外山正一、井上哲次郎、矢田部良吉によって日本最初の近代詩集「新体詩抄」が刊行された。各人の序文と、西洋詩の影響のもとに創始された七五調、五七調の新詩形により、翻訳詩十四編、創作詩五編からなる。内容的にはいづれも習作の域を出ないが、従来の和歌・俳句と異なる西洋詩の形式に倣った新時代の詩を模索するものであり、文学界に影響をあたえた。外山正一は新体詩を次のように位置づけている。

我々の作に新体詩という名称をつけたのは在来の長歌、若しくは短歌とは異なった一種新体の詩なるが故でありました。されば七五でも五七でも、はた是等の如き窮屈なる詩形に制約せられざるものと雖も、苟も長歌短歌等、昔より在り来りの詩歌に異なりたる詩的の作は皆これを称して新体詩といはむとするのが我々の考えでありました。

〔新体詩及び朗誦法〕・明治二十九年『帝国文学』

しかし鈴木氏は秋香自身は別の見解を抱いていたとして次の文章をひく。

今日に至りては已に世上一般之(新体詩)を用ひ、殆ど普通の呼称の如く、或は抒情詩といひ、叙事詩などさへ唱ふめれば、今よりは正しき字義に従ひ、学校唱歌の如き声を永めて歌ふものは新体歌と称し、その他は新体詩といふべく、さらには従前詩と称せしものは更に漢詩と称して差別を立つべきなり。

〔秋香歌かたり〕・明治四〇年・五車樓・傍線筆者

明治十五年に『新体詩抄』が出て、明治二十二年森鷗外の訳詩集『於母影』、やがて明治三十年には鳥崎藤村の『若菜集』の刊行等、新体詩を呼称するものは「已に世上一般之を用ひ、殆ど普通の呼称の如く」となっていた。これに秋香は明治二八年八月「新体詩論」(『太陽』)および「新体詩歌集」(外山正一・上田万年・阪正臣共著)において、「新体詩」と「新体歌」の区別を提唱する。「新体詩は西洋の体に形とり、国語もてつづる一種のもの」であり、新体歌は「歌の字は詠也、長く其の声を引く詠也、声をもつて吟詠上下

す」として、古来の長歌の語調をあらためたもので、改行や節などは西洋に倣つても、淵源は日本の短歌長歌にあるという。「声を永めて歌ふものは新体歌と称し、その他は新体詩といふべく」と考えたのである。『秋香集 長歌』における作品は唱歌・校歌は無論のこと、忠君・詠史・戦役を詠ずるものも新体詩ではなく明治近代の新しい長歌＝新体歌とみるべきであるう。

秋香の新体詩の語調はどのようなものであったか、本書冒頭の「軍旗」を見ると、長句と短句の語調によつて不定形のリズムを作り出している。

日出づる国の、ひいでたる、姿をえがく、日の御旗

きらめく光は、叡聖なる、元帥陛下の、大御稜威、

濃きくれなゐは、忠武なる、海陸軍の、心のいろ

また本書の書名に関して、鈴木氏は次のように考究する。

「新体詩」という称を用ゐることは妥当性を欠くので、「新体歌」としたほうが我が国の伝統に即しているといふ論である。従つて書名に「詩」ではなく「歌」を用ゐ、「短歌」と対を成すものとして、本書を『秋香集 長歌』と名付けたのであろう

### 三 『秋香集 長歌』

翻刻された『秋香集 長歌』下巻の歌数は八十六編、その構成は鈴木氏が「日清・日露の戦役に題材をもとめた歌が多くおさめられてゐる。忠君・学校関連・詠史・戦役とおおまかな部立てはなされてをり、上巻の内容が気になるところである。」と指摘されたとお

りである。制作年代は東京高等女学校幹事となった明治二〇年(1887) 四十六歳のころから、日清戦争をへて日露戦争が終った明治三十八年(1905) 六十四歳前後といえる。本書には、秋香が走り抜けた明治という時代の空気が迫ってくる。揖斐高氏は序文で色濃いい「国家主義、道徳主義」と述べられたが、これもまた『秋香集 長歌』の特色である。

冒頭、「軍旗」(明治二十七年九月十三日明治天皇広島行幸)、「錦の御旗」、「日本刀」など忠君愛国の歌をすえるが、続く「玉章」は、雁、夢路の花、竹取、鳶の細道など、古典から題材をえた典雅な六章の長歌であり、国文学者、歌人秋香が慕わしい作品である。「写真」(女学唱歌)も「ゆかしきおもわ、さやけき声音/ただみる如く、聞く心地せり」と七七、七七を二句連ね、やさしくゆかしい唱歌である。総じて前半は学校教育に理想をもとめ、少年少女たちの徳育や学業への激励に心をくだく教育者、古典学者としての秋香があつて、忠孝、勤勉、愛国の歌で若者を鼓舞し、友情、師恩、親子、は情にあふれる。「三韓征伐」や「橘逸勢女」などの詠史には人をひきこむドラマがある。

しかし第六番目の歌、「行路難」は「思へばけはしき、よをゆく路や、思へば危き、よわたるふねや」と七七七七を四句、二聯の歌で勤勉を勧める歌であるが、次の「破難関」は「一度はいづれ、死ぬこの身体、倒れよ溺れよ、世のために国のために」とのちの太平洋戦争の軍歌としても通用する歌詞が入ってくる。明治二十八年九月、『新体詩歌集』序文で秋香は熱意をもって言う。

そもそも新体とはこれまでなき躰といふ名ならずや。しかこれまでなき躰を立つるにいたれるは、これまである躰にては、今日(の)情をばいひあらはしがたきによれる事なれば、たとへいかなる句法、いかなる詞ならんも、歌の躰を失はざらん限りは、採り用ひて、意を尽さんことをこそはかるべけれ。… (傍線筆者)

新しい歌体・詩体を持たなくては、激動する近代に生きる人の情をとうていいいつくせない、いかなる句法、いかなる詞もとりに用いようというのである。世は日清戦争の勝利と三国干渉から日露戦争へと進む緊張した世界情勢下にあつた。そして『秋香集 長歌』最後の二十三の歌はすべて愛国忠心、日清日露の戦役を主題とした長歌である。歌集の初めは「孝養」「勉励」「忠君」「愛国」が目立つ程度であつたものが六十四番「やまと心」あたりから激烈な調子が見え、「すすめ矢玉」「襲撃」「進撃」「海戦」「征討」「神の擁護」「威海衛」「宣戦詔勅」「討伐」と続いていく。ここで関心をひくのは、明治二十七年、八年の日清戦争の頃の歌は清国海軍の提督丁汝昌を悼む「丁汝昌」や、戦争に翻弄される兵士の家族の心情を思いやる「あ、老楽士」「軍士の妻」などの歌がみえるが、最後の二十三歌にその余裕はない。ここには日清戦争からさらに西洋列強ロシアと対峙するはめになった小国日本のさらなる緊張の高まりが、秋香をして軍国主義的な歌の創作へとかりたてている。銃後にある己にできる唯一のこと、それは新体歌を通して、自分が手塩にかけた若者たちの勇武生存を願い、日本国天皇の大御稜威と全国民の生存を

願う気持ちに充滿している。この一連の戦時下の歌を詠むと、秋香の切ないまでの焦躁が伝わってくる。

秋香は歌人として新しい時代の長歌を求めた。「今日の情をいひあらは」そうと「鋭くいかめしく、烈しくあはただしきがごとき様を十分言い表さんには、なお長短句によるはしかず」（新体詩歌集）と提唱した長歌Ⅱ新体歌は、皮肉なことに唱歌・校歌はもとより、軍歌にもっともふさわしい歌の体であったのではないかと考える。

『歌集』の九番目に「夢」と題する、秋香にしては一風変わった歌がある。

たちまちに山、たちまちに海、花の下かけ、  
たどるかた、見れば逆巻く、浪のうへ、

あやしきものは、夢なるか」

何かはそれを、あやしといはむ、盛者必衰、

会者定離、かはりてやまぬは、よのすがた、

これはたやがて、夢なるを、

「たちまち深い山中にあり、たちまち紺青の大海原に出る。花の下蔭をそぞろ歩かか見れば、逆巻く波の上にいる。このあやしい現象は夢なのか。」と問いかけ、「何でそれをあやしいと言おうか、盛者必衰、会者定離の言葉どおり、変じてやまないのは世のすがた」であると答える。そして「世のすがた」はまた夢と変じていく。明治という時代を駆け抜け、歌い続けた中村秋香の心情ではないかと思う。

（平成二十四年九月十四日発行 一一四頁 三〇〇〇円 武蔵野書院）

注 『文学』第9巻第4号（2008年7・8月）「座談会・詩歌の近代」における勝原晴希氏「中村秋香『新体詩歌集』」を参考にした。

（ふじい・みほこ 大学院博士後期課程在学）